

あ い さ つ 運 動 で

—— 登場人物の心情表現を伏せた資料の活用 ——

- (1) 主題名 真の友情と責任の自覚 [2 - (3)] 関連項目 [4 - (1) , 4 - (2)]
 (2) ねらい 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努めるようにするなかで、本当の友情とは何かについて考える。
 (3) 資料名 「あいさつ運動で」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導 入	1 資料への円滑な導入を図る。	遅刻をしたことがありますか。その時、どんな気持ちでしたか。 ・先生に叱られるからいやだなと思った ・みんなしているので、あまり悪いと思わなかった ・体の調子が悪かったのしかたなかった	友情という価値とは直接関係ないが、資料のキーワードとなる遅刻に焦点をあてて、資料への円滑な導入を図る。
展 開	2 資料を読み、内容を理解する。 3 尚也の気持ちを考える。 4 雄太の気持ちを考える。 5 尚也の気付きについて理解する。	尚也は、遅刻したことについて、どんな気持ちでいたのだろうか。 ・3分の遅刻ぐらいいいじゃないか ・自分の遅刻には、やむを得ない事情があったんだ ・雄太に迷惑かけたな 雄太は、なぜ原稿づくりが進まなかったのだろうか。 ・生活委員長であることをいいことに尚也の遅刻を見逃していいものかと悩んでいる ・自分が不正を働くことになると苦しんでいる 尚也は、最後に何に気が付いたのだろうか。 ・自分が雄太を苦しめていること ・雄太がとてもいいやつだということ ・雄太を悪者にするとところだったこと	効果的な資料提示を工夫する。 雄太への思いについては、深く追求しない。 雄太の尚也に対する思いよりも、雄太自身の善意との葛藤を浮き彫りにする。 雄太を苦しめているのが、自分であることのみならず、友だちを苦しめることで友情が成り立つのかまで追求したい。
終 末	6 心のノートに記入する。	心のノートの P.48 を開いて、感じたことを書き込んでみよう。 ・私の理想とする友だちは・・・ ・私が友だちに伝えたいのは・・・	資料から離れて、自分にとっての友だちに移し替えて考えさせたい。

「あいさつ運動で」

僕は石田尚也。中学3年生だ。クラスは三年五組。学習委員をしている。趣味はゲームとスポーツ、どこにもいそうな普通の中学生で、性格も優しいほうだと思う。でも親友の雄太に言わせると、ちょっとおおざっぱで細かいところは気にしないタイプみたい。自分では全然意識してないのだけど、この僕の性格がとんでもないことを引き起こしてしまったんだ。

十一月に入った第一水曜日の放課後、いつものように定例の生徒会各委員会が開かれた。僕は学習委員会へ、雄太は生徒会役員として生活委員会に行き、一緒に帰る約束だった。雄太とはいわゆる幼なじみで、家も近所だし、いわゆる一番の親友ってやつかな。雄太は本当に真面目で宿題も完璧、時間もしっかり守る、おまけに生徒会執行部役員っていう優等生タイプだ。

僕たちはいつものように、橋の上で休憩しながら今日あったことなどを話していた。すると雄太が、今日の生活委員会のことを話し始めた。雄太は元気がなさそうに、

「担当の松原先生から話があつて、寒くなったせいもあつて遅刻が増えているんだって。だから生徒会で改善できないか、って提案があつたんだ。僕もそのことは気づいていたし、生活委員長として放っておけないし。なんかいい方法はないかなあ。悩むよなあ。」と言い出した。

僕は、あんまり興味がなかったけど、いつになく暗い雄太が心配になつて、

「いつもの雄太らしくないなあ……。うん、そうだなあ、松原先生は、優しいし、僕も役に立ちたいんだけど……。そうだ、僕のいとこの学校では朝のあいさつ運動というのをやってるらしいよ。係の人が順番で校門のところであいさつをして、なんか雰囲気がよくなったって言つてた。それで遅刻の多かった学級にはお昼のボール貸し出しが禁止になるんだって。」と、以前に聞いたことを話したんだ。すると雄太は明るい顔になつて、

「そうかあ。遅刻調べとなると反対する人もいるかもしれないけど、あいさつ運動は大切なことだな。僕も考えてみるよ。ありがとう、尚也。でもお前が一番危ないんじゃないかなあ。最近いつもギリギリだぜ。」と笑つた。

あいさつ運動は、翌日から一週間、生活委員が二人ずつ下足室前で行い、集計は生活委員長がすることになったようだ。委員会の人々も責任をもつてがんばつてたようだし、同級生や下級生のあいさつも心なしに大きな声になったように思えたし、笑顔も増えたようで、提案した僕もちよっぴり「どんなもんだい。」と得意な気持ちになつていた。ただ気になるのは、僕たちの三年五組と三年一組の遅刻数が多くて、明日の朝、一人でも遅刻すればペナルティーが決まってしまうということだ。

その夜、大阪に単身赴任している父から電話があつた。ちよつと体調を崩して三日ほど入院するので、身の回りのものを持ってきて欲しいということだった。母は翌日の弟たちの遠足が気になつていたが、

「大丈夫だよ、母さん。おにぎりをつくれればいいんだろ。僕だつてできるさ。卵焼きだつて作れるよ。心配しないでお母さんはお父さんの所にいつてあげて」と僕が言い張るものだから、弟たちの服やリュックを全部準備して、最終の新幹線に間に合うように大阪に向かつたんだ。僕は、

「よし、ここはひとついいところを見せなきゃな。明日は六時には起きて、弟たちを起こして、おむすびづくりだな」と、ちよつと大人になつたような気分で布団に入つた。

「あつ、七時だ。」

僕は、興奮してなかなか寝付けなかったせいか、目覚まし時計もいつの間にか自分で止めていたらしい。

「まずい……。」と、ものすごく焦りながらも、弟たちをやり起こし、支度をさせながらお弁当づくりに取りかかった。

しかし、焦れば焦るほどうまくいなくて、なんとか弟たちの支度をすませて自宅を出たのは八時二十分だった。学校まではどう走っても一五分はかかる。

「まずいなあ」と思いながら、一生懸命走って、学校へ着いたのが八時三十三分。

「ああ、三分遅刻だあ。」

校門を見ると、なんとそこには雄太が一人立っている。

「そうか、今日は雄太が当番なんだ。ラッキーかもしれないぞ。」

「尚也！……。」

「ごめんよ。雄太。遅刻をすればみんなに迷惑をかけることは知っていたんだけど……。妹たちの服装の準備とか、分らないことが多くて……。でも、たった三分の遅刻ぐらい大目に見てくれてもいいじゃないか。俺も弟や妹のためという理由があったんだし。見逃してくれよ。友達じゃないか。友情ってそういうものだろう。」

雄太は困ったような顔をした。

「わかった、尚也。このことは二人だけの秘密にしよう。すぐに教室に行け！」

その後、なぜだか僕はもはやもやした気分が抜けなくて、授業にも身が入らなかった。おかげさనికిまりだのなんだのと言ってたら、学校生活が窮屈でたまらないという思いもある。僕のせいでクラスのボールの貸し出しができないことになったら、みんなに合わす顔がないし……。でもなあ……。。

雄太は、あいさつ運動の集計結果の報告をのせた学校新聞を明日までに書かなければいけないと言って教室に一人残っていた。でも、原稿用紙を前にして、なかなか新聞づくりが進まないようだった。一緒に帰ろうと呼びかけようとしたが、雄太の深刻な表情を見ていると声がかけれなくなつた。「あいつは何を深刻に考えているんだろう。」雄太の、深刻な表情は次第に苦しんでいる表情に見えてきた。「あいつは何を苦しんでいるんだ。」

しばらくの間、僕は、雄太が苦しんでいる原因に気づくことができず、教室の外から窓越しに雄太を見つめていた。

辺りはもう暗くなりかけていた。僕は、やっとあることに気がついた。鈍感な自分に腹が立った。

「雄太！僕、決めたよ。」

僕は、勢いよく雄太のいる教室のドアを開けた。

活用に生かすための実践報告

「あいさつ運動で」

1 主題設定の理由

中学生の時期は、お互いに心を許しあえる友達を真剣に求めるようになる時期といわれる。しかし、ややもすると無批判に同調したり、その場だけの関心事や都合のいい相手とだけの関係が友情であると思いこむ傾向にある。また自分が傷つくのを恐れるあまり一定の距離を保ったままの関係しか構築できないこともある。真の友情は、相互に変わらない信頼や敬愛の念があって成り立つものであり、時には相手の人間的な成長を願い、高め合い、協力を惜しまない関係であることを学ばせたい。対象となるのは、道徳性の発達が自分の好き嫌いや損得から進んで、周囲や社会のことが考えられはじめる中学校第2学年から第3学年が適切である。

2 指導過程の工夫

関連項目である「4 - (1) 社会的役割と責任」や「4 - (2) 遵法精神」に重点がおかれなように留意する必要がある。確かに人間は一人では生きていけないし、集団の一員としてよりよく生きていくためには自分の属する集団の意義を十分理解することが大切である。しかし、このことにばかり目を向けすぎると自分たちの利益のみを追求し、かかわりの薄い他の集団や周囲の人々の生活に無関心であるばかりか排他的にさえなりやすい。真の友情を理解させるには、相手の内面的なよさに目を向けさせ、敬愛や信頼の心情とのかかわりに気付かせる必要がある。この資料では、展開局面での登場人物の心情表現を省いている。生徒には、場面状況からしっかりと

登場人物の心情を推察させることを通して、好ましい人間関係の在り方について気付かせたい。

3 発問の工夫

資料前半部分については、軽く扱い、後半部分の尚也が遅刻してしまっただけの二人の揺れ動く心を中心に発問を設定した。資料に尚也の心の揺れや気付きなどの表現を省くという工夫を加えたので、発問そのものはシンプルになった。そのため、より深く考えさせるための補助発問が重要になってくる。「このままで尚也は雄太にとっての大切な友だちになれるだろうか。」等、深い信頼に裏打ちされた友情の成立条件を考えさせる発問を工夫する必要がある。

4 生徒の反応

責任か友情かという判断を役割演技を用いて取り組んだところ、「生活委員として学校の規律を正す責任がある」などの意見が出た反面、「規則・規則では学校生活が楽しくなくなる」「たった3分ぐらい」と予想通りの反応がでたが、概ね友人をかばう意見が多かった。最終局面での、二人の心情については、十分な反応を引き出すことが出来なかった。

5 実践者からの一言

討論で盛り上がったため、道徳的判断に重きをおきすぎて、指導の視点がぶれてしまった。そのため、関連項目4 - (1)の「社会的役割と責任」に流れがちになった。資料の工夫を生かすためにも、後半部分の発問に重点を置いて、思考を深め、友情についてより高い価値に気付く授業になるよう注意したい。(仁方中学校 石田孝夫)